

エココンパクトシティにおける地域交流拠点

株式会社オリエンタルコンサルタンツ 正会員 ○野谷 将準
株式会社オリエンタルコンサルタンツ 非会員 富安 浩
株式会社オリエンタルコンサルタンツ 非会員 藤原 尚
株式会社オリエンタルコンサルタンツ 非会員 高橋 直樹

1. 目的

都市は、経済活動や生活活動を支える重要な器であるが、近年、地球環境問題や都市形成の問題などから持続可能な社会の構築に向けて、98年のEUの意見書からコンパクトシティ論が台頭している。その後、日本においては、政策的に平成18年の「まちづくり三法」の改正からコンパクトシティの取組が動き出している。

本稿において取り上げる高松市では、平成20年に策定された「高松市都市計画マスタープラン」の将来都市構造として「多核連携・集約型環境配慮都市（多核連携型コンパクト・エコシティ）」を目指していくとの位置づけが行われた。この計画では、高松市の中心市街地を広域交流拠点とし、その拠点を取り巻く形で8つの地域交流拠点を形成し、この拠点間を公共交通軸で結んだ都市構造として、拠点に都市機能を集積することで市街地の拡大を抑制した効率的で環境負荷の少ない持続可能な都市づくりを進めていくこととしている。

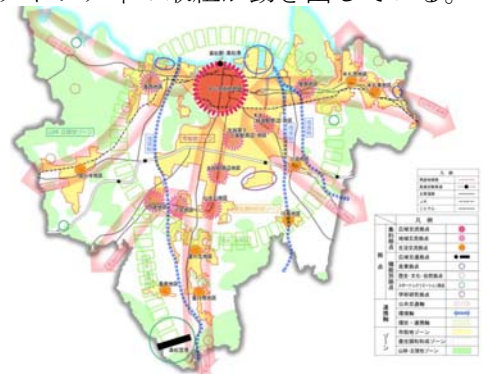


図1 高松市の将来都市構造

本稿では、高松市の目指す都市構造の一翼を担う地域交流拠点における整備の取組から高松市の目指す多核連携型コンパクト・エコシティの姿を考察し、日本版のコンパクトシティの取組可能性について論じる。

2. 高松市の将来都市構造の一翼を担う仏生山地区における計画の経緯

高松市が地域交流拠点に位置づけた仏生山地区には、昭和5年から香川県農業試験場が運営されてきたが平成23年10月に綾川町へ移転したことから、試験場跡地の約11haを活用したまちづくりが進められることとなった。平成21年には香川県と高松市が共同で「香川県農業試験場跡地を活用したまちづくり検討委員会」を設置し検討を進め、同年12月に報告書がとりまとめられた。報告書では、「居住機能・健康増進機能・交流機能・防災機能・交通結節機能」の都市機能の集積していく方向性が示され、跡地全体を北側・中央・南側の3つの区域に分け、北側・中央は高松市が、南側は香川県が主体となって具体的な取組が進められることとなった。

県が主体となった南側の区域については、平成23年に事業計画コンペを実施し、市民農園や産直市場、レストラン、高齢者専用賃貸住宅などを整備する計画案が選定され、民間事業者による整備が進められている。

市が主体となる中央の区域は、高松市新病院の移転整備を進めることとなり、実施設計、施設整備へと取組が進んでいる。北側の区域は、高松琴平電鉄鉄道の仏生山駅に隣接しているため、駅を含めて報告書で示された都市機能の実現に向けて基本となる整備検討を進めている。

3. 地域交流拠点の姿とは

仏生山地区の香川県農業試験場跡地は、高松市の将来都市構造の重要な地域交流拠点として整備が求められる中で、地域交流拠点の具体像が明確に定義されておらず、形成イメージとして「拠点性、利便性が高い」地区が地域交流拠点と示されているのみである。

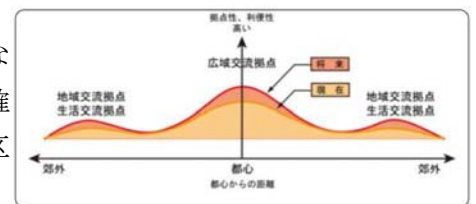


図2 都市構造の集積度

地域交流拠点は拠点性・利便性が高い地区との定義において、どのような機能を有するべきなのかとの議論から始める必要がある。では、本来の議論から紐解くと、コンパクトシティ論の起こりとなった要因とは、成長の限界によるサステナビリティの確保であり、将来的な資源の枯渇、地球環境問題の低減・回避である。産業革命以降の技術革新により様々な社会インフラが整備され、それは集団から個人へと展開されてことで都

市は集中から拡散へと変質してきたが、少し時代を遡れば、日本は向う三軒両隣の言葉に始まる村社会で概ね徒歩圏内において日常生活が基本的に完結していた。そこでは職住近接であり、地産地消によりフードマイレージなど環境問題につながる要因も少なかった。そうしたことから、少し前の時代を思い出しつつ、都市すべてを数十年前に戻すのではなく、徒歩に加え、電動自転車やパーソナルモビリティビークルなどを活用して移動可能なエリア（近隣住区は半径 400m で新たな住区は例 800m～1km 程度）「新近隣住区」において生活の諸機能が整い、自立的な生活区域を形成する。ここで言う生活の諸機能とは、居住機能・交流機能・健康福祉機能・防災機能が基本となり、仏生山地区は地域交流拠点の中で最南部に位置し、鉄道駅を有しているため、高松市中心部への交通結節機能と、新病院による医療機能、行政情報提供機能を加えた 7 つの機能を有していることが望まれる。

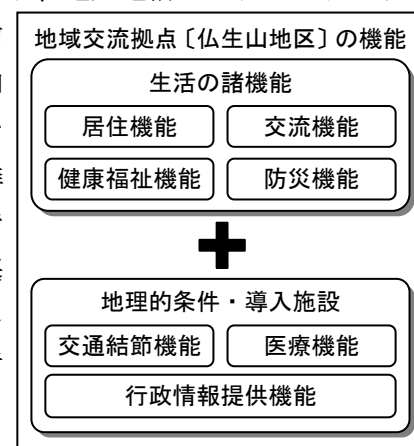


図3 地域交流拠点の機能

4. 地域交流拠点の仏生山地区の計画

(1) 仏生山地区の計画案

仏生山地区の地域交流拠点の計画案は、中央エリアに新病院である医療機能を主体に整備し、一部敷地を活用したパークアンドライド駐車場の交通結節機能も担う計画としている。北側エリアは、交通結節機能を強化する仏生山駅の駅前広場と、住民サービスを行う行政機能に加え、交流機能・健康福祉機能を有する地域交流センター、耐震性飲料用貯水槽や防災トイレなど防災機能を有する公園、多世代が共生し、子育て施設が併設された居住機能を民間活力により実現していく計画である。計画の実現で都市サービスが充実した地域交流拠点の形成が進むと考えられる。

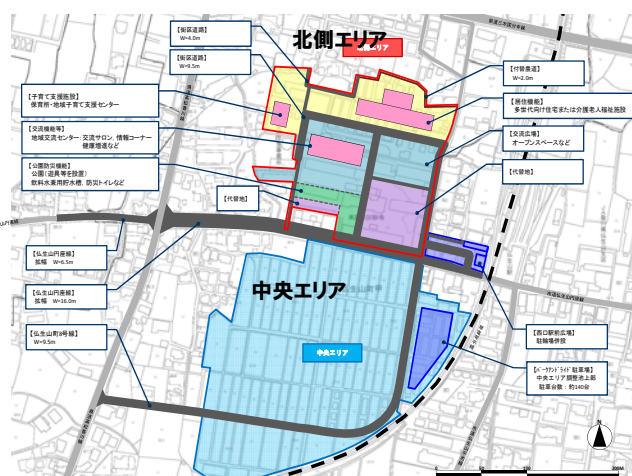


図4 仏生山地区の計画案

(2) コンパクトシティの実現性の検討

日本版コンパクトシティの実現については、地域交流拠点の形成効果として居住・交流・医療・福祉・交通・行政機能が地域内で提供され、日常生活が基本的に完結した地域を形成することができる。そうしたことで過度に自動車依存が進んだ社会が是正され、高松市が目指す「多核連携・集約型環境配慮都市」の姿が見える。今後は、本地域をモデルに残る 7 つの地域交流拠点に展開することで将来都市構造の実現が図られる。

(3) 更なる展開 地域交流拠点における行政機能の充実

地域交流拠点の都市サービス機能については、計画案で配置されているが、地域交流拠点の求心性を高めていく上では、行政機能の充実による地域の中核としての位置づけが重要である。高松市では、平成 24 年度に「高松市地域行政組織再編計画基本構想」が策定され、この基本構想では、行政機能を本庁集約型から地域行政組織へと分散させるとの方針が示されており、現在の「本庁→支所・出張所」から組織を再編し、「本庁→総合センター（仮称）→地区センター（仮称）」の三層構造へと移行するとしている。平成 25 年度には具体的な計画となる「高松市地域行政組織再編計画」の策定が予定されており、これらの行政組織再編を進める中で、地域交流拠点として仏生山地区の行政機能を充実するような計画を進めていくことが望まれる。

5. おわりに

高松市が目指す将来都市構造の「多核連携・集約型環境配慮都市（多核連携型コンパクト・エコシティ）」は、日本版コンパクトシティの可能性を示す事例であり、本計画の地域交流拠点は、コンパクトシティの効果検証を行う好事例であると思われる。また、香川県ではパーソントリップ調査が実施されており、地域交流拠点が整備される直前の移動状況が把握できることから、それらのデータを基に地域交流拠点整備後に影響範囲と考えられる仏生山地区及び南部地域で流動状況を把握し、効果検証を行うことが望まれる。